

# 石巻健育会病院

症 例 概 要 患者氏名：N.Sさん（60代 女性）

病名：脳出血（左視床出血）30年前より関節リウマチ治療中。

入院期間：平成29年3月～平成29年9月

経過：平成29年3月に自宅で倒れているところを夫が発見。N病院救急搬送され右片麻痺、失語症が認められた。同月リハビリ目的で当院に転院。立位もままならず不安定で介助を必要としたが、本人の「杖でもいいから歩いて帰りたい」という強い希望から、回復期リハビリテーション病棟でリハビリを実施し、自宅内杖歩行自立が可能となった。

## 内 容

---

回復期リハビリテーション病棟に入院した当初、高次脳機能障害と右方麻痺であったが、運動失調、感覚障害に合わせ30年前からの関節リウマチによる両肩の激痛と下肢の脚長差、原因不明の胸腰椎の圧迫骨折により立位・歩行ともに困難な状態であった。

また、関節リウマチによる両肩の激痛と原因不明の圧迫骨折による腰痛のため、入院後2ヶ月間に渡り積極的なリハビリテーションの実施が困難であった。しかし、本人・家族の回復への期待が高く、関節リウマチの痛みが軽減すれば直ぐに歩けるようになり退院することも可能であると、現状を安易に考えた行動や言動が度々認められました。

そのため、特にインフォームドコンセント実施の重要性を重視し、本人・家族に何度も現状の説明を行い、歩いて帰ることの難しさと歩いて帰るために必要なリハビリの運動量や負荷の理解を得ることから始めました。入院約2ヵ月後に両肩と腰の痛みが軽減したためバランス検査（FBS：Functional Balance Scale）を実施しましたが、8/56点と歩行はもとより支持物なしでは立位もままならない状態で、入院期間中での杖歩行の獲得は困難な状態でした。リハビリスタッフは、日々 N.Sさんの痛みの度合いを傾聴しながらリハビリを行っていきました。経過とともに本人の認識が変化し、N.Sさんから「直ぐに帰れると思ってた」・「こんなに思うように身体が動かないんだね」・「歩いて帰るために大変でもリハビリを頑張るから宜しくね」と前向きな言葉が聞かれるようになり、リハビリに取り組む姿勢を見せてくれるようになりました。

体が回復するにつれ、出来ることが増えてきたことと周りからかけられる言葉に後押しされ、杖歩行獲得に向けて運動量や負荷の多いリハビリ内容をこなすようになりました。

その結果、バランス検査（FBS：Functional Balance Scale）は入院5ヶ月で40/56点まで改善し、歩行も杖歩行が可能となり、本人・家族の希望に沿って退院することができました。

この度の事例では、N,Sさん・御家族様からすれば初めての疾患・体の状況に合わせて丁寧に説明し・同意を得ながら実施したことや辛いリハビリ内容を乗り越えられるようリハビリスタッフが同様のリハビリ内容を一緒に行い共有・共感を図ったことで、N,Sさんの病態理解に繋がり、また、辛いリハビリにも耐え目標を達成することができたと考えております。